

※ 東工大は解答や詳細の配点は発表していません。解答例と配点例は、STEPが独自に作成したものです。

問題一覧

1

次の問いに答えよ。

(1)  $|x^2 - x - 23|$  の値が, 3 を法として 2 に合同である正の整数  $x$  をすべて求めよ。

(2)  $k$  個の連続した正の整数  $x_1, \dots, x_k$  に対して,

$$|x_j^2 - x_j - 23| \quad (1 \leq j \leq k)$$

の値がすべて素数になる  $k$  の最大値と, その  $k$  に対する連続した正の整数  $x_1, \dots, x_k$  をすべて求めよ。ここで  $k$  個の連続した整数とは,

$$x_1, x_1 + 1, x_1 + 2, \dots, x_1 + k - 1$$

となる列のことである。

2

複素数平面上の異なる 3 点  $A, B, C$  を複素数  $\alpha, \beta, \gamma$  で表す。ここで  $A, B, C$  は同一直線上にないと仮定する。

(1)  $\triangle ABC$  が正三角形となる必要十分条件は,  

$$\alpha^2 + \beta^2 + \gamma^2 = \alpha\beta + \beta\gamma + \gamma\alpha$$
 であることを示せ。

(2)  $\triangle ABC$  が正三角形のとき,  $\triangle ABC$  の外接円上の点  $P$  を任意にとる。このとき,  

$$AP^2 + BP^2 + CP^2$$

および

$$AP^4 + BP^4 + CP^4$$

を外接円の半径  $R$  を用いて表せ。ただし 2 点  $X, Y$  に対し,  $XY$  とは線分  $XY$  の長さを表す。

3

座標空間に 5 点

$$O(0, 0, 0), A(3, 0, 0), B(0, 3, 0),$$

$$C(0, 0, 4), P(0, 0, -2)$$

をとる。さらに  $0 < a < 3, 0 < b < 3$  に対して 2 点  $Q(a, 0, 0)$  と  $R(0, b, 0)$  を考える。

(1) 点  $P, Q, R$  を通る平面を  $H$  とする。  
 平面  $H$  と線分  $AC$  の交点  $T$  の座標, および  
 平面  $H$  と線分  $BC$  の交点  $S$  の座標を求めよ。

(2) 点  $Q, R, S, T$  が同一円周上にあるための必要十分条件を  $a, b$  を用いて表し, それを満たす点  $(a, b)$  の範囲を座標平面上に図示せよ。

→解答例は 3 ページから。

※ 東工大は解答や詳細の配点は発表していません。解答例と配点例は、STEPが独自に作成したものです。

4

$n$  を正の奇数とする。

曲線  $y = \sin x$  ( $(n-1)\pi \leq x \leq n\pi$ ) と  $x$  軸で囲まれた部分を  $D_n$  とする。直線  $x+y=0$  を  $\ell$  とおき、 $\ell$  の周りに  $D_n$  を 1 回転させて出来る回転体を  $V_n$  とする。

- (1)  $(n-1)\pi \leq x \leq n\pi$  に対して、点  $(x, \sin x)$  を  $P$  とおく。また  $P$  から  $\ell$  に下ろした垂線と  $x$  軸の交点を  $Q$  とする。線分  $PQ$  を  $\ell$  の周りに 1 回転させてできる図形の面積を  $x$  の式で表せ。
- (2) (1) の結果を用いて、回転体  $V_n$  の体積を  $n$  の式で表せ。

5

$k$  を正の整数とし、 $a_k = \int_0^1 x^{k-1} \sin\left(\frac{\pi x}{2}\right) dx$  とおく。

- (1)  $a_{k+2}$  を  $a_k$  と  $k$  を用いて表せ。
- (2)  $k$  を限りなく大きくするとき、数列  $\{ka_k\}$  の極限值  $A$  を求めよ。
- (3) (2) の極限值  $A$  に対し、 $k$  を限りなく大きくするとき、数列  $\{k^m a_k - k^n A\}$  が 0 ではない値に収束する整数  $m, n$  ( $m > n \geq 1$ ) を求めよ。またそのときの極限值  $B$  を求めよ。
- (4) (2) と (3) の極限值  $A, B$  に対し、 $k$  を限りなく大きくするとき、数列  $\{k^p a_k - k^q A - k^r B\}$  が 0 ではない値に収束する整数  $p, q, r$  ( $p > q > r \geq 1$ ) を求めよ。またそのときの極限值を求めよ。

→解答例は 3 ページから。

※ 東工大は解答や詳細の配点は発表していません。解答例と配点例は、STEPが独自に作成したものです。

1

次の問いに答えよ。

(1)  $|x^2 - x - 23|$  の値が、3 を法として 2 に合同である正の整数  $x$  をすべて求めよ。

(2)  $k$  個の連続した正の整数  $x_1, \dots, x_k$  に対して、

$$|x_j^2 - x_j - 23| \quad (1 \leq j \leq k)$$

の値がすべて素数になる  $k$  の最大値と、その  $k$  に対する連続した正の整数  $x_1, \dots, x_k$  をすべて求めよ。ここで  $k$  個の連続した整数とは、

$$x_1, x_1 + 1, x_1 + 2, \dots, x_1 + k - 1$$

となる列のことである。

【難易度】

(1) 易 (2) やや易

【講評】

頻出問題で、経験済みであれば絶対に外せない。経験をしていなかったとしても、mod 3 に着目することが示されているのでなんとかしたい。

【解答例】

以下、mod 3 とする。

(1)  $f(x) = x^2 - x - 23$  ( $x = 1, 2, \dots$ ) とする。

$x$	1	2	3	4	5	6	7	8
$f(x)$	-23	-21	-17	-11	-3	7	19	33
$ f(x) $	23	21	17	11	3	7	19	33

上の表より、 $x \leq 5$  において  $|f(x)| \equiv 2$  となるのは  $x = 1, 3, 4$  のときに限る。

また、 $f(x) = x(x-1) - 23$  から  $f(x)$  は単調増加であるから、 $x \geq 6$  のとき  $f(x) \geq f(6) = 7$  より

$$|f(x)| = f(x) \equiv x(x-1) + 1$$

ゆえ

$$x \equiv 0 \text{ のとき } |f(x)| \equiv 0 \cdot (-1) + 1 \equiv 1,$$

$$x \equiv 1 \text{ のとき } |f(x)| \equiv 1 \cdot 0 + 1 \equiv 1,$$

$$x \equiv 2 \text{ のとき } |f(x)| \equiv 2 \cdot 1 + 1 \equiv 0.$$

よって  $x \geq 6$  のとき  $|f(x)| \equiv 2$ 。

ゆえに求める  $x$  は  $x = 1, 3, 4$ 。☐

(2) (1) より、 $x = 8, 11, 14, \dots$  において  $|f(x)| \equiv 0$  であり、 $|f(x)| = f(x) \geq f(8) = 33$  であるから、 $|f(x)|$  は 33 以上の 3 の倍数ゆえ素数ではない。

また (1) より、 $1 \leq x \leq 7$  のとき、 $|f(x)|$  が素数となる  $x$  は  $x = 1, 3, 4, 5, 6, 7$  のみ。

よって求める  $k$  の最大値は  $k = 5$  であり、5 個の連続する整数は  $3, 4, 5, 6, 7$  である。☐

【配点例】(60点)

※東工大の数学の配点は、例年 5 点刻みと予想される。  
(なぜなら、数学の開示得点が常に 5 の倍数)。

(1)(計 40 点)

(ア)  $x \leq 5$  において  $|f(x)| \equiv 2$  となるのが  $x = 1, 3, 4$  のときに限ることに 10 点。

(イ)  $x \geq 6$  において  $x \equiv 0, 1$  のとき  $|f(x)| \equiv 1$  となることに 15 点。

(ウ)  $x \geq 6$  において  $x \equiv 2$  のとき  $|f(x)| \equiv 0$  となることに 15 点。

(2)(計 20 点)

(エ)  $x = 8, 11, 14, \dots$  において  $|f(x)|$  が素数でないことに 10 点。(ウ)がなければ NG)

(オ) 結論に 10 点。(結論のみで OK)

※ 東工大は解答や詳細の配点は発表していません。解答例と配点例は、STEPが独自に作成したものです。

2

複素数平面上の異なる3点A, B, Cを複素数  $\alpha, \beta, \gamma$  で表す。ここでA, B, Cは同一直線上にないと仮定する。

(1)  $\triangle ABC$  が正三角形となる必要十分条件は、  

$$\alpha^2 + \beta^2 + \gamma^2 = \alpha\beta + \beta\gamma + \gamma\alpha$$
 であることを示せ。

(2)  $\triangle ABC$  が正三角形のとき、 $\triangle ABC$  の外接円上の点Pを任意にとる。このとき、  

$$AP^2 + BP^2 + CP^2$$
 および

$$AP^4 + BP^4 + CP^4$$

を外接円の半径  $R$  を用いて表せ。ただし2点X, Yに対し、XYとは線分XYの長さを表す。

【難易度】

(1) やや易 (2) 標準

【講評】

(1) は有名問題だが、複素数平面は得意不得意が分かれる単元なので、点差は開いている。

(2) はいろいろな解法が考えられる良問。正三角形の中心を原点として考えてよいことに気づきたいところ。また、点Pが三角形の頂点に一致するときや、点Pが外接円の劣弧  $\widehat{BC}$  の中点にあるときを考えれば、結論は予想できる。

【解答例】

(1)  $\triangle ABC$  が正三角形になる条件は

$$\frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha} = \cos\left(\pm \frac{\pi}{3}\right) + i \sin\left(\pm \frac{\pi}{3}\right) \quad (\text{複号同順})$$

であり、これを同値変形していく。

$$\frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha} = \frac{1}{2} \pm \frac{\sqrt{3}}{2}i$$

$$\frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha} - \frac{1}{2} = \pm \frac{\sqrt{3}}{2}i$$

$$\left(\frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha} - \frac{1}{2}\right)^2 = -\frac{3}{4}$$

$$\left(\frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha}\right)^2 - \left(\frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha}\right) + \frac{1}{4} = -\frac{3}{4}$$

$$\left(\frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha}\right)^2 - \left(\frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha}\right) + 1 = 0$$

$$(\gamma - \alpha)^2 - (\gamma - \alpha)(\beta - \alpha) + (\beta - \alpha)^2 = 0$$

$$\begin{aligned} \gamma^2 - 2\alpha + \alpha^2 - (\beta\gamma - \gamma\alpha - \alpha\beta + \alpha^2) \\ + \beta^2 - 2\alpha\beta + \alpha^2 = 0 \\ \alpha^2 + \beta^2 + \gamma^2 = \alpha\beta + \beta\gamma + \gamma\alpha. \quad \text{㊟} \end{aligned}$$

【別解】 その1

$\triangle ABC$  が正三角形である

$$\Leftrightarrow \triangle ABC \sim \triangle BCA$$

$$\Leftrightarrow \frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha} = \frac{\alpha - \beta}{\gamma - \beta}. \quad \dots\dots(*)$$

(\*)を变形すると

$$\begin{aligned} (\gamma - \alpha)(\gamma - \beta) &= (\alpha - \beta)(\beta - \alpha) \\ \gamma^2 - \gamma\alpha - \beta\gamma + \alpha\beta &= \alpha\beta - \alpha^2 - \beta^2 + \alpha\beta \\ \alpha^2 + \beta^2 + \gamma^2 &= \alpha\beta + \beta\gamma + \gamma\alpha. \quad \text{㊟} \end{aligned}$$

【別解】 その2

$$\frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha} = z$$

とすると  $\gamma - \alpha = (\beta - \alpha)z$ ,  $\gamma = (\beta - \alpha)z + \alpha$ .  
 この下で  $\alpha^2 + \beta^2 + \gamma^2 = \alpha\beta + \beta\gamma + \gamma\alpha$  を同値変形していく。

$$\begin{aligned} \gamma(\gamma - \alpha - \beta) + (\alpha^2 - \alpha\beta + \beta^2) &= 0 \\ \{(\beta - \alpha)z + \alpha\}\{(\beta - \alpha)z - \beta\} \\ &+ (\alpha^2 - \alpha\beta + \beta^2) = 0 \\ (\beta - \alpha)^2 z^2 - (\beta - \alpha)^2 z - \alpha\beta \\ &+ (\alpha^2 - \alpha\beta + \beta^2) = 0 \\ (\beta - \alpha)^2 z^2 - (\beta - \alpha)^2 z + (\beta - \alpha)^2 &= 0. \end{aligned}$$

$\beta \neq \alpha$  より

$$z^2 - z + 1 = 0$$

$$z = \frac{1 \pm \sqrt{3}i}{2}$$

$$z = \cos\left(\pm \frac{\pi}{3}\right) + i \sin\left(\pm \frac{\pi}{3}\right). \quad (\text{複号同順})$$

よって示された。㊟

(2) P(z)とする。

四角形A, B, C, Pを平行移動しても辺の長さは変わらないので、 $\triangle ABC$ の外接円の中心を原点に移動して考えてよい。

$$|\alpha| = |\beta| = |\gamma| = |z| = R$$

であり、正三角形の重心と外心は一致するので

$$\frac{\alpha + \beta + \gamma}{3} = 0 \quad \text{から} \quad \alpha + \beta + \gamma = 0. \quad \dots\dots\textcircled{1}$$

さらに(1)より  $\alpha^2 + \beta^2 + \gamma^2 = 0. \quad \dots\dots\textcircled{2}$

また

$$\begin{aligned} AP^2 &= |z - \alpha|^2 \\ &= (z - \alpha)(\bar{z} - \bar{\alpha}) \\ &= |z|^2 - \alpha\bar{z} - \bar{\alpha}z + |\alpha|^2 \\ &= 2R^2 - \alpha\bar{z} - \bar{\alpha}z \end{aligned}$$

※ 東工大は解答や詳細の配点は発表していません。解答例と配点例は、STEPが独自に作成したものです。

より

$$\begin{aligned} & AP^2 + BP^2 + CP^2 \\ &= 6R^2 - (\alpha + \beta + \gamma)\bar{z} - (\overline{\alpha + \beta + \gamma})z \\ &= 6R^2 - 0\bar{z} - (\bar{0})z \quad (\text{①より}) \\ &= 6R^2. \quad \square \end{aligned}$$

さらに

$$\begin{aligned} & AP^4 \\ &= 4R^4 + (\alpha\bar{z})^2 + (\bar{\alpha}z)^2 \\ &\quad + 2\{-2R^2\alpha\bar{z} + |\alpha|^2|z|^2 - 2R^2\bar{\alpha}z\} \\ &= 4R^4 + \alpha^2\bar{z}^2 + \bar{\alpha}^2z^2 + 2R^4 - 4R^2(\alpha\bar{z} + \bar{\alpha}z) \\ &= 6R^4 + \alpha^2\bar{z}^2 + \bar{\alpha}^2z^2 - 4R^2(\alpha\bar{z} + \bar{\alpha}z) \end{aligned}$$

より

$$\begin{aligned} & AP^4 + BP^4 + CP^4 \\ &= 18R^4 + (\alpha^2 + \beta^2 + \gamma^2)\bar{z}^2 + \overline{\alpha^2 + \beta^2 + \gamma^2}z^2 \\ &\quad - 4R^2\{(\alpha + \beta + \gamma)\bar{z} + \overline{\alpha + \beta + \gamma}z\} \\ &= 18R^4. \quad \square \quad (\text{①, ②より}) \end{aligned}$$

別解 その1

$$\omega = \cos \frac{2}{3}\pi + i\sin \frac{2}{3}\pi \text{ とする.}$$

四角形 A, B, C, P を平行移動・回転移動・線対称移動しても辺の長さは変わらないので、 $\triangle ABC$  の外心を原点とし

$$\alpha = R(1+0i) = R, \quad \beta = R\omega, \quad \gamma = R\omega^2$$

としてよく、 $P(z)$  とすると  $|z| = R$  である。

$$\begin{aligned} & AP^2 + BP^2 + CP^2 \\ &= |z - R|^2 + |z - R\omega|^2 + |z - R\omega^2|^2 \\ &= |z - R||\bar{z} - R| + |z - R\omega||\bar{z} - R\omega^2| \\ &\quad + |z - R\omega^2||\bar{z} - R\omega| \\ &= |z|^2 - R(z + \bar{z}) + R^2 \\ &\quad + |z|^2 - R(z\omega^2 + \bar{z}\omega) + R^2 \\ &\quad + |z|^2 - R(z\omega + \bar{z}\omega^2) + R^2 \\ &= 2R^2 - R(z + \bar{z}) \\ &\quad + 2R^2 - R(z\omega^2 + \bar{z}\omega) \\ &\quad + 2R^2 - R(z\omega + \bar{z}\omega^2) \\ &= 6R^2 - R\{z(1 + \omega + \omega^2) + \bar{z}(1 + \omega + \omega^2)\} \\ &= 6R^2. \quad \square \end{aligned}$$

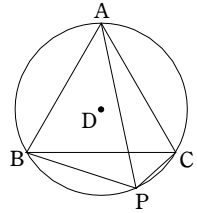
また

$$\begin{aligned} & AP^4 + BP^4 + CP^4 \\ &= 4R^4 - 4R^3(z + \bar{z}) + R^2(z + \bar{z})^2 \\ &\quad + 4R^4 - 4R^3(z\omega^2 + \bar{z}\omega) + R^2(z\omega + \bar{z}\omega^2)^2 \\ &\quad + 4R^4 - 4R^3(z\omega + \bar{z}\omega^2) + R^2(z\omega^2 + \bar{z}\omega)^2 \\ &= 12R^4 - 4R^3\{z(1 + \omega + \omega^2) + \bar{z}(1 + \omega + \omega^2)\} \\ &\quad + R^2\{z(1 + \omega^2 + \omega^4) + 6|z|^2 + \bar{z}(1 + \omega^4 + \omega^2)\} \\ &= 12R^4 + 6R^4 = 18R^4. \quad \square \end{aligned}$$

別解 その2

$\triangle ABC$  の外心を  $D(\vec{0})$  とし、

$$\begin{aligned} \vec{DA} &= \vec{a}, \\ \vec{DB} &= \vec{b}, \\ \vec{DC} &= \vec{c}, \\ \vec{DP} &= \vec{p} \end{aligned}$$



とすると

$$\begin{aligned} |\vec{a}| &= |\vec{b}| = |\vec{c}| = |\vec{p}| = R, \\ \vec{a} \cdot \vec{b} &= \vec{b} \cdot \vec{c} = \vec{c} \cdot \vec{a} = R^2 \cos \frac{2}{3}\pi = -\frac{R^2}{2}. \end{aligned}$$

$\triangle ABC$  の外心は重心と一致するので

$$\frac{\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}}{3} = \vec{0} \quad \text{すなわち} \quad \vec{a} + \vec{b} + \vec{c} = \vec{0}.$$

よって

$$\begin{aligned} & AP^2 + BP^2 + CP^2 \\ &= |\vec{p} - \vec{a}|^2 + |\vec{p} - \vec{b}|^2 + |\vec{p} - \vec{c}|^2 \\ &= |\vec{p}|^2 - 2\vec{p} \cdot \vec{a} + |\vec{a}|^2 \\ &\quad + |\vec{p}|^2 - 2\vec{p} \cdot \vec{b} + |\vec{b}|^2 \\ &\quad + |\vec{p}|^2 - 2\vec{p} \cdot \vec{c} + |\vec{c}|^2 \\ &= (2R^2 - 2\vec{p} \cdot \vec{a}) + (2R^2 - 2\vec{p} \cdot \vec{b}) + (2R^2 - 2\vec{p} \cdot \vec{c}) \\ &= 6R^2 - 2\vec{p} \cdot (\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}) \\ &= 6R^2 - 2\vec{p} \cdot \vec{0} = 6R^2. \quad \square \end{aligned}$$

また

$$\begin{aligned} & AP^4 + BP^4 + CP^4 \\ &= (2R^2 - 2\vec{p} \cdot \vec{a})^2 \\ &\quad + (2R^2 - 2\vec{p} \cdot \vec{b})^2 + (2R^2 - 2\vec{p} \cdot \vec{c})^2 \\ &= 4R^4 - 8R^2\vec{p} \cdot \vec{a} + 4(\vec{p} \cdot \vec{a})^2 \\ &\quad + 4R^4 - 8R^2\vec{p} \cdot \vec{b} + 4(\vec{p} \cdot \vec{b})^2 \\ &\quad + 4R^4 - 8R^2\vec{p} \cdot \vec{c} + 4(\vec{p} \cdot \vec{c})^2 \\ &= 12R^4 - 8R^2\vec{p} \cdot (\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}) \\ &\quad + 4\{(\vec{p} \cdot \vec{a})^2 + (\vec{p} \cdot \vec{b})^2 + (\vec{p} \cdot \vec{c})^2\}. \\ &= 12R^4 + 4\{(\vec{p} \cdot \vec{a})^2 + (\vec{p} \cdot \vec{b})^2 + (\vec{p} \cdot \vec{c})^2\}. \end{aligned}$$

ここで  $\vec{a} + \vec{b} + \vec{c} = \vec{0}$  より  $\vec{c} = -(\vec{a} + \vec{b})$  から

$$(\vec{p} \cdot \vec{c})^2 = \{-\vec{p} \cdot (\vec{a} + \vec{b})\}^2 = (\vec{p} \cdot \vec{a} + \vec{p} \cdot \vec{b})^2$$

より

$$\begin{aligned} & (\vec{p} \cdot \vec{a})^2 + (\vec{p} \cdot \vec{b})^2 + (\vec{p} \cdot \vec{c})^2 \\ &= 2\{(\vec{p} \cdot \vec{a})^2 + (\vec{p} \cdot \vec{a})(\vec{p} \cdot \vec{b}) + (\vec{p} \cdot \vec{b})^2\}. \end{aligned}$$

また  $\vec{p} = s\vec{a} + t\vec{b}$  ( $s, t$  は実数) とすると、

$$\begin{aligned} |\vec{p}| &= R \text{ より} \\ |\vec{p}|^2 &= R^2 \end{aligned}$$

※ 東工大は解答や詳細の配点は発表していません。解答例と配点例は、STEPが独自に作成したものです。

$$s^2|\vec{a}|^2 + 2st\vec{a} \cdot \vec{b} + t^2|\vec{b}|^2 = R^2$$

$$R^2s^2 - stR^2 + R^2t^2 = R^2$$

$$s^2 + st + t^2 = 1.$$

よって

$$\vec{p} \cdot \vec{a} = (\vec{s}\vec{a} + t\vec{b}) \cdot \vec{a} = R^2s - \frac{R^2}{2}t = R^2\left(s - \frac{t}{2}\right),$$

$$\vec{p} \cdot \vec{b} = (\vec{s}\vec{a} + t\vec{b}) \cdot \vec{b} = R^2t - \frac{R^2}{2}s = R^2\left(t - \frac{s}{2}\right)$$

より

$$(\vec{p} \cdot \vec{a})^2 + (\vec{p} \cdot \vec{a})(\vec{p} \cdot \vec{b}) + (\vec{p} \cdot \vec{b})^2$$

$$= R^4 \left\{ \left(s - \frac{t}{2}\right)^2 + \left(s - \frac{t}{2}\right)\left(t - \frac{s}{2}\right) + \left(t - \frac{s}{2}\right)^2 \right\}$$

$$= R^4 \left( \frac{3}{4}s^2 - \frac{3}{4}st + \frac{3}{4}t^2 \right)$$

$$= \frac{3}{4}R^4(s^2 - st + t^2) = \frac{3}{4}R^4.$$

よって

$$AP^4 + BP^4 + CP^4$$

$$= 12R^4 + 4 \cdot 2 \cdot \frac{3}{4}R^4 = 18R^4. \quad \square$$

**別解** その3

四角形 A, B, C, P を平行移動・回転移動・線対称移動しても辺の長さは変わらないので、 $\triangle ABC$  の外心を原点とし

$$A(R, 0), B\left(-\frac{1}{2}R, \frac{\sqrt{3}}{2}R\right),$$

$$C\left(-\frac{1}{2}R, -\frac{\sqrt{3}}{2}R\right),$$

$$P(R\cos\theta, R\sin\theta) \quad (0 \leq \theta < 2\pi)$$

としてよい。

$$\frac{1}{R^2}(AP^2 + BP^2 + CP^2)$$

$$= (\cos\theta - 1)^2 + \sin^2\theta$$

$$+ \left(\cos\theta + \frac{1}{2}\right)^2 + \left(\sin\theta - \frac{\sqrt{3}}{2}\right)^2$$

$$+ \left(\cos\theta + \frac{1}{2}\right)^2 + \left(\sin\theta + \frac{\sqrt{3}}{2}\right)^2$$

$$= 2 - 2\cos\theta$$

$$+ 2 + \cos\theta - \sqrt{3}\sin\theta$$

$$+ 2 + \cos\theta + \sqrt{3}\sin\theta$$

$$= 6$$

より

$$AP^2 + BP^2 + CP^2 = 6R^2. \quad \square$$

さらに

$$\frac{1}{R^2}(AP^4 + BP^4 + CP^4)$$

$$= (2 - 2\cos\theta)^2$$

$$+ (2 + \cos\theta - \sqrt{3}\sin\theta)^2$$

$$+ (2 + \cos\theta + \sqrt{3}\sin\theta)^2$$

$$= 4 - 8\cos\theta + 4\cos^2\theta$$

$$+ (2 + \cos\theta)^2 - 2\sqrt{3}\sin\theta(2 + \cos\theta) + 3\sin^2\theta$$

$$+ (2 + \cos\theta)^2 + 2\sqrt{3}\sin\theta(2 + \cos\theta) + 3\sin^2\theta$$

$$= 12 + 6\cos^2\theta + 6\sin^2\theta$$

$$= 18$$

より

$$\frac{1}{R^2}(AP^4 + BP^4 + CP^4) = 18R^4. \quad \square$$

**別解** その4

正弦定理より

$$AB = AC = BC = 2R\sin\frac{\pi}{3} = \sqrt{3}R.$$

(ア) 点 P が  $\triangle ABC$  の頂点と一致するとき

P が C と一致したと

してよい。

このとき

$$AP^2 + BP^2 + CP^2$$

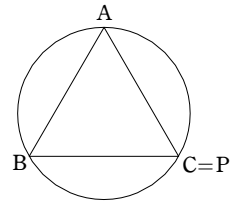
$$= (\sqrt{3}R)^2 + (\sqrt{3}R)^2 + 0$$

$$= 6R^2,$$

$$AP^4 + BP^4 + CP^4$$

$$= (\sqrt{3}R)^4 + (\sqrt{3}R)^4 + 0$$

$$= 18R^4.$$



(イ) 点 P が  $\triangle ABC$  の頂点と一致しないとき

P が劣弧  $\widehat{BC}$  上にあるとしてよい。

$$PA = a,$$

$$PB = b,$$

$$PC = c$$

とする。

トレミーの定理より

$$a \cdot \sqrt{3}R = \sqrt{3}R \cdot b + \sqrt{3}R \cdot c$$

$$a = b + c.$$

また四角形 ABPC は円に内接するので

$$\angle BPC = \pi - \angle BAC = \frac{2}{3}\pi$$

ゆえ、 $\triangle BPC$  において余弦定理より

$$(\sqrt{3}R)^2 = b^2 + c^2 - 2bc \cdot \cos\frac{2}{3}\pi$$

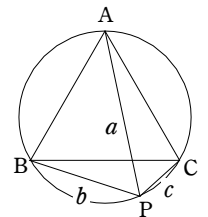
$$b^2 + c^2 + bc = 3R^2.$$

よって

$$AP^2 + BP^2 + CP^2$$

$$= a^2 + b^2 + c^2$$

$$= (b + c)^2 + b^2 + c^2$$



※ 東工大は解答や詳細の配点は発表していません。解答例と配点例は、STEPが独自に作成したものです。

$$=2(b^2+bc+c^2)=6R^2. \text{ 答}$$

また

$$\begin{aligned} & AP^4+BP^4+CP^4 \\ &=a^4+b^4+c^4 \\ &=(a^2+b^2+c^2)^2-2(a^2b^2+b^2c^2+c^2a^2) \\ &=36R^2-2\{a^2(b^2+c^2)+b^2c^2\} \\ &=36R^2-2\{(b+c)^2(b^2+c^2)+b^2c^2\} \\ &=36R^2-2(b^4+2b^3c+3b^2c^2+2bc^3+c^4) \\ &=36R^2-2(b^2+c^2+bc)^2 \\ &=36R^4-2(6R)^2=18R^4. \text{ 答} \end{aligned}$$

【参考】

(イ) での  $a=b+c$  は有名.

トレミーの定理に気づけなければ,  $\triangle ABP$ ,  $\triangle APC$  に余弦定理を用いて

$$a^2+b^2-ab=3R^2,$$

$$a^2+c^2-ac=3R^2$$

より辺々引いて

$$b^2-c^2-a(b-c)=0$$

$$(b-c)(b+c-a)=0$$

$$b=c \text{ または } a=b+c$$

として場合分けすれば何とかなる.

また初等幾何的には, 線分 PB を  $(b+c):c$  に外分する点を E とすると,  $\triangle EAB \equiv \triangle PAC$  より  $\triangle EAP$  が正三角形から  $a=b+c$  が言える.

### 【配点例】(60点)

(1)(計 20 点)

$$\begin{aligned} \text{(ア)} \quad & \frac{\gamma-\alpha}{\beta-\alpha} = \cos\left(\pm\frac{\pi}{3}\right) + i\sin\left(\pm\frac{\pi}{3}\right), \\ & \frac{\gamma-\alpha}{\beta-\alpha} = \frac{\alpha-\beta}{\gamma-\beta}, \quad \frac{\gamma-\alpha}{\beta-\alpha} = z \text{ などに } \boxed{10 \text{ 点}}. \end{aligned}$$

(イ) その後の変形に  $\boxed{10 \text{ 点}}$ .

(2)(計 40 点)

※ 解答で示した通り, 様々な解法があるので, 解法に応じて適切に採点する.

(ウ)  $AP^2+BP^2+CP^2=6R^2$  までに  $\boxed{20 \text{ 点}}$ .

※ 結論だけなら  $\boxed{5 \text{ 点}}$ .

(エ)  $AP^4+BP^4+CP^4=18R^4$  までに  $\boxed{20 \text{ 点}}$ .

※ 結論だけなら  $\boxed{5 \text{ 点}}$ .

※ 東工大は解答や詳細の配点は発表していません。解答例と配点例は、STEPが独自に作成したものです。

3

座標空間に5点

$O(0, 0, 0)$ ,  $A(3, 0, 0)$ ,  $B(0, 3, 0)$ ,  
 $C(0, 0, 4)$ ,  $P(0, 0, -2)$

をとる。さらに  $0 < a < 3$ ,  $0 < b < 3$  に対して2点  
 $Q(a, 0, 0)$  と  $R(0, b, 0)$  を考える。

- (1) 点  $P$ ,  $Q$ ,  $R$  を通る平面を  $H$  とする。  
 平面  $H$  と線分  $AC$  の交点  $T$  の座標, および  
 平面  $H$  と線分  $BC$  の交点  $S$  の座標を求めよ。
- (2) 点  $Q$ ,  $R$ ,  $S$ ,  $T$  が同一円周上にあるための  
 必要十分条件を  $a, b$  を用いて表し, それを満  
 たす点  $(a, b)$  の範囲を座標平面上に図示せよ。

【難易度】

(1) やや易 (2) やや難

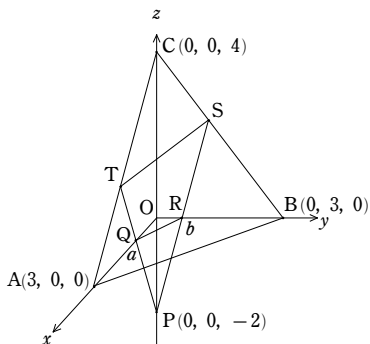
【講評】

(1) は, 平面の方程式の知識が使えるが, 使わな  
 なくても簡単に解ける。

(2) は, 方べきの定理の逆以外の方針だと, 計算  
 量が多くやり切れないだろう。

【解答】

(1)



平面  $H$  と平面  $y=0$  の交線は直線  $PQ$  であるから,  
 点  $T$  は直線  $PQ$  と直線  $AC$  の交点である。  
 同様に, 平面  $H$  と平面  $x=0$  の交線は直線  $PS$   
 であるから, 点  $S$  は直線  $PR$  と直線  $BC$  の交点  
 である。…………(\*)

点  $T$  が直線  $PQ$  上にあるから

$$\overrightarrow{PT} = k\overrightarrow{PQ}$$

とすると

$$\overrightarrow{OT} = \overrightarrow{OP} + k\overrightarrow{PQ}$$

$$= \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ -2 \end{pmatrix} + k \begin{pmatrix} a \\ 0 \\ 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} ak \\ 0 \\ -2+2k \end{pmatrix}.$$

また点  $T$  が直線  $AC$  上にあるから

$$\overrightarrow{OT} = (1-t)\overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{OC}$$

とすると

$$\overrightarrow{OT} = \begin{pmatrix} 3-3t \\ 0 \\ 4t \end{pmatrix}.$$

よって

$$\begin{cases} ak = 3-3t \\ -2+2k = 4t \end{cases}$$

から  $k = \frac{9a}{2a+3}$ ,  $t = \frac{-a+3}{2a+3}$ .

よって

$T$  の座標は  $\left( \frac{9a}{2a+3}, 0, \frac{-4a+12}{2a+3} \right)$ . 〇

対称性より

$S$  の座標は  $\left( 0, \frac{9b}{2b+3}, \frac{-4b+12}{2b+3} \right)$ . 〇

【別解】 その1

(\*) まで同じ。

$\triangle OPQ$  と直線  $AC$  において, メネラウスの定理  
 より

$$\frac{CO}{PC} \cdot \frac{AQ}{OA} \cdot \frac{TP}{QT} = 1$$

$$\frac{2}{3} \cdot \frac{3-a}{3} \cdot \frac{TP}{QT} = 1$$

から

$$TP:QT = 9:(6-2a)$$

$$PQ:PT = \{9 - (6-2a)\}:9 = (2a+3):9$$

ゆえ

$$\overrightarrow{PT} = \frac{9}{2a+3}\overrightarrow{PQ}, \text{ 以下略.}$$

【別解】 その2

(\*) まで同じ。

直線  $PQ$  の方程式は  $\begin{cases} \frac{x}{a} + \frac{z}{-2} = 1, \\ y = 0 \end{cases}$

直線  $AC$  の方程式は  $\begin{cases} \frac{x}{3} + \frac{z}{4} = 1, \\ y = 0 \end{cases}$

これを連立して

$$x = \frac{9a}{2a+3}, y = 0, z = \frac{-4a+12}{2a+3}.$$

以下略。



※ 東工大は解答や詳細の配点は発表していません。解答例と配点例は、STEPが独自に作成したものです。

- (2) (1)より点 T は直線 PQ 上にあり，点 S は直線 PR 上にあるから，4 点 Q, R, S, T が同一円周上にあるための条件は，方べきの定理の逆より

$$|\overrightarrow{PQ}| |\overrightarrow{PT}| = |\overrightarrow{PR}| |\overrightarrow{PS}|. \quad \dots\dots \textcircled{1}$$

(1)の経過より

$$|\overrightarrow{PT}| = \frac{9}{2a+3} |\overrightarrow{PQ}|, \quad |\overrightarrow{PR}| = \frac{9}{2b+3} |\overrightarrow{PS}|.$$

①より

$$\begin{aligned} \frac{9}{2a+3} |\overrightarrow{PQ}|^2 &= \frac{9}{2b+3} |\overrightarrow{PS}|^2 \\ (a^2+4)(2b+3) &= (b^2+4)(2a+3) \\ 2a^2b+3a^2+8b+12 &= 2ab^2+3b^2+8a+12 \\ 2ab(a-b)+3(a+b)(a-b)-8(a-b) &= 0 \\ (a-b)\{2ab+3(a+b)-8\} &= 0 \\ (a-b)\{(2a+3)b-(8-3a)\} &= 0 \end{aligned}$$

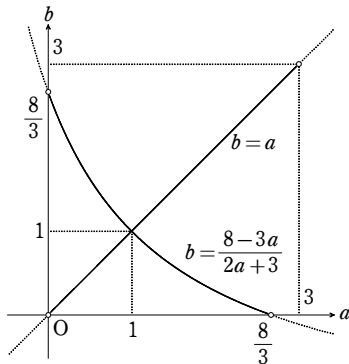
から求める条件は

$$a=b \quad \text{または} \quad b = \frac{8-3a}{2a+3}. \quad \text{答}$$

ここで

$$\frac{8-3a}{2a+3} = \frac{25}{4} \cdot \frac{1}{a+\frac{3}{2}} - \frac{3}{2}$$

より，(a, b) を図示すると以下の通り。 答



**【配点例】(60点)**

(1)(計 20 点)

- (ア) T の座標までに 15 点 .
- (イ) S の座標に 5 点 .

(2)(計 40 点)

- (ウ) ①に 15 点 .
- (エ)  $(a-b)\{2ab+3(a+b)-8\}=0$  に 15 点 .
- ※  $a=b$  があれば 5 点 .
- (オ) (a, b) の図示に 10 点 .

※ 東工大は解答や詳細の配点は発表していません。解答例と配点例は、STEPが独自に作成したものです。

4

$n$  を正の奇数とする。

曲線  $y = \sin x$  ( $(n-1)\pi \leq x \leq n\pi$ ) と  $x$  軸で囲まれた部分を  $D_n$  とする。直線  $x + y = 0$  を  $\ell$  とおき、 $\ell$  の周りに  $D_n$  を 1 回転させて出来る回転体を  $V_n$  とする。

- (1)  $(n-1)\pi \leq x \leq n\pi$  に対して、点  $(x, \sin x)$  を  $P$  とおく。また  $P$  から  $\ell$  に下ろした垂線と  $x$  軸の交点を  $Q$  とする。線分  $PQ$  を  $\ell$  の周りに 1 回転させてできる図形の面積を  $x$  の式で表せ。
- (2) (1) の結果を用いて、回転体  $V_n$  の体積を  $n$  の式で表せ。

**【難易度】**

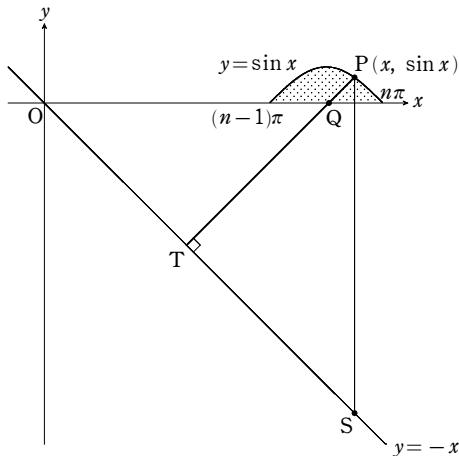
(1) やや易 (2) 標準

**【講評】**

斜軸回転と呼ばれる定形問題。これは外せない。なお、(1) の  $P$  は  $(x, \sin x)$  となっているが、これだと受験生は解きにくい。 $(t, \sin t)$  などの配慮がほしかったところ。

**【解答】**

(1)  $n$  が奇数より、 $D_n$  は以下の打点部。



$S(x, -x)$  とする。また、直線  $PQ$  と  $\ell$  の交点を  $T$  とすると

$$OS = \sqrt{2}x, \quad PS = x + \sin x,$$

$$ST = PT = \frac{PS}{\sqrt{2}} = \frac{x + \sin x}{\sqrt{2}},$$

$$OT = QT = OS - ST = \frac{x - \sin x}{\sqrt{2}}.$$

よって求める図形の面積は

$$\pi(PT^2 - QT^2)$$

$$= \pi \left\{ \frac{(x + \sin x)^2}{2} - \frac{(x - \sin x)^2}{2} \right\} = 2\pi x \sin x. \quad \text{答}$$

(2)  $OT = t$  とすると

$$t = \frac{x - \sin x}{\sqrt{2}} \quad \text{から} \quad \frac{dt}{dx} = \frac{1 - \cos x}{\sqrt{2}} \geq 0.$$

よって  $x$  が増加するとき  $t$  も増加するので、 $P$  を通り  $\ell$  に垂直な直線は  $y = \sin x$  と 2 つ以上の共有点を持つことはなく

$$V_n = \int_{(n-1)\pi}^{n\pi} (2\pi x \sin x) \frac{dt}{dx} dx$$

$$= \sqrt{2} \pi \int_{(n-1)\pi}^{n\pi} x \sin x (1 - \cos x) dx.$$

ここで  $n$  が奇数であることに留意し

$$\int_{(n-1)\pi}^{n\pi} x \sin x (1 - \cos x) dx$$

$$= \int_{(n-1)\pi}^{n\pi} x (\sin x - \sin x \cos x) dx$$

$$= \int_{(n-1)\pi}^{n\pi} x \left( \sin x - \frac{1}{2} \sin 2x \right) dx$$

$$= \left[ x \left( -\cos x + \frac{1}{4} \cos 2x \right) \right]_{(n-1)\pi}^{n\pi}$$

$$= \left[ -(-\sin x + \frac{1}{8} \sin 2x) \right]_{(n-1)\pi}^{n\pi}$$

$$= n\pi \left( 1 + \frac{1}{4} \right) - (n-1)\pi \left( -1 + \frac{1}{4} \right)$$

$$= \frac{8n-3}{4} \pi.$$

ゆえに

$$V_n = \frac{(8n-3)\pi^2}{2\sqrt{2}}. \quad \text{答}$$

**【配点例】(60点)**

(1)(計 20 点)

(ア)  $PT = \frac{x + \sin x}{\sqrt{2}}$  に **5 点**.

(イ)  $QT = \frac{x - \sin x}{\sqrt{2}}$  に **5 点**.

(ウ) 結論に **10 点**.

(2)(計 40 点)

(エ)  $\frac{d}{dx} OT \geq 0$  に **5 点**.

(オ)  $V_n = \sqrt{2} \pi \int_{(n-1)\pi}^{n\pi} x \sin x (1 - \cos x) dx$  に **15 点**.

(カ) 結論に **20 点**.

※ 東工大は解答や詳細の配点は発表していません。解答例と配点例は、STEPが独自に作成したものです。

5

$k$  を正の整数とし、 $a_k = \int_0^1 x^{k-1} \sin\left(\frac{\pi x}{2}\right) dx$  とおく。

- (1)  $a_{k+2}$  を  $a_k$  と  $k$  を用いて表せ。
- (2)  $k$  を限りなく大きくするとき、数列  $\{ka_k\}$  の極限值  $A$  を求めよ。
- (3) (2) の極限值  $A$  に対し、 $k$  を限りなく大きくするとき、数列  $\{k^m a_k - k^n A\}$  が 0 ではない値に収束する整数  $m, n$  ( $m > n \geq 1$ ) を求めよ。またそのときの極限值  $B$  を求めよ。
- (4) (2) と (3) の極限值  $A, B$  に対し、 $k$  を限りなく大きくするとき、数列  $\{k^p a_k - k^q A - k^r B\}$  が 0 ではない値に収束する整数  $p, q, r$  ( $p > q > r \geq 1$ ) を求めよ。またそのときの極限值を求めよ。

**【難易度】**

- (1) やや易 (2) 標準 (3) やや難 (4) 難

**【講評】**

(1) は部分積分して漸化式を作る典型問題。(2) は、東工大頻出の評価と極限。これを取れば合格圏。(3) も東工大頻出のテーマだが、かなりの難問。(4) は試験場での解答は無理だろう。

**【解答】**

(1)  $a_{k+2}$

$$\begin{aligned}
 &= \int_0^1 x^{k+1} \sin \frac{\pi x}{2} dx \\
 &= \left[ -\frac{2}{\pi} x^{k+1} \cos \frac{\pi x}{2} + \frac{4}{\pi^2} (k+1) x^k \sin \frac{\pi x}{2} \right]_0^1 \\
 &\quad - \frac{4}{\pi^2} (k+1) \int_0^1 x^{k-1} \frac{2}{\pi} \sin \frac{\pi x}{2} dx \\
 &= \frac{4}{\pi^2} (k+1) - \frac{4}{\pi^2} k(k+1) a_k \\
 &= -\frac{4}{\pi^2} (k+1) (ka_k - 1). \quad \text{ⓐ} \dots\dots \text{①}
 \end{aligned}$$

(2) ①より

$$ka_k = -\frac{\pi^2}{4} \cdot \frac{a_{k+2}}{k+1} + 1. \quad \dots\dots \text{②}$$

また、 $0 < x < 1$  において

$$0 < x^{k+1} \sin \frac{\pi x}{2} < x^{k+1}$$

より

$$0 < \int_0^1 x^{k+1} \sin \frac{\pi x}{2} dx < \int_0^1 x^{k+1} dx$$

$$0 < a_{k+2} < \left[ \frac{x^{k+2}}{k+2} \right]_0^1 = \frac{1}{k+2}$$

$$0 < \frac{a_{k+2}}{k+1} < \frac{1}{(k+2)(k+1)}.$$

$k \rightarrow \infty$  とすると

$$\frac{1}{(k+2)(k+1)} \rightarrow 0 \text{ より } \frac{a_{k+2}}{k+1} \rightarrow 0.$$

よって②より  $A = \lim_{k \rightarrow \infty} ka_k = 1.$  ⓑ

(3) ①より

$$\begin{aligned}
 (k+2)a_{k+2} &= -\frac{4}{\pi^2} (k+2)(k+1)(ka_k - 1) \\
 &= -\frac{4}{\pi^2} \cdot \frac{(k+2)(k+1)}{k^2} (k^3 a_k - k^2).
 \end{aligned}$$

$b_k = k^3 a_k - k^2$  とおくと

$$b_k = -\frac{\pi^2}{4} \cdot \frac{1}{\left(1 + \frac{2}{k}\right)\left(1 + \frac{1}{k}\right)} \cdot (k+2)a_{k+2}.$$

(2) より  $\lim_{k \rightarrow \infty} (k+2)a_{k+2} = 1$  ゆえ

$$\lim_{k \rightarrow \infty} b_k = -\frac{\pi^2}{4} \cdot 1 \cdot 1 = -\frac{\pi^2}{4}.$$

また

$$k^m a_k - k^n A = k^{m-3} b_k + k^{m-1} - k^n \quad \dots\dots \text{③}$$

$$= k^{m-1} \left( \frac{b_k}{k^2} + 1 - k^{-m+n+1} \right). \quad \dots\dots \text{④}$$

ここで

$$m > n \geq 1 \text{ より } m \geq 2 \text{ つまり } \lim_{k \rightarrow \infty} k^{m-1} = \infty,$$

$$\lim_{k \rightarrow \infty} \frac{b_k}{k^2} = 0$$

から、④が収束する必要条件は

$$\lim_{k \rightarrow \infty} k^{-m+n+1} = 1 \text{ つまり } -m+n+1=0$$

より  $m = n+1$  である。

この下で ③ =  $k^{n-2} b_k$ .

$$\lim_{k \rightarrow \infty} b_k = -\frac{\pi^2}{4} \text{ より, } k^m a_k - k^n A \text{ が } 0 \text{ でない値}$$

に収束するのは

$$n-2=0 \text{ つまり } (m, n) = (3, 2)$$

のときに限り、その極限値は

$$B = 1 \cdot \left( -\frac{\pi^2}{4} \right) = -\frac{\pi^2}{4}. \quad \text{ⓒ}$$

※ 東工大は解答や詳細の配点は発表していません。解答例と配点例は、STEPが独自に作成したものです。

$$(4) \quad b_{k+2} = (k+2)^3 a_{k+2} - (k+2)^2 \\ = -\frac{4}{\pi^2} (k+2)^3 (k+1)(ka_k - 1) - (k+2)^2 \quad (\text{①より})$$

から  $k+2 \neq 0$  より

$$\frac{b_{k+2}}{k+2} = -\frac{4}{\pi^2} (k+2)^2 (k+1)(ka_k - 1) - (k+2)$$

ゆえ

$$(k+2)^2 (k+1)(ka_k - 1) + \frac{\pi^2}{4} (k+2) \\ = -\frac{\pi^2 b_{k+2}}{4(k+2)} \quad \dots\dots \text{⑤}$$

ここで

⑤の左辺

$$= (k^3 + 5k^2 + 8k + 4)(ka_k - 1) + \frac{\pi^2}{4} (k+2) \\ = \left(k^4 a_k - k^3 + \frac{\pi^2}{4} k\right) + \frac{5k^2 + 8k + 4}{k^2} b_k + \frac{\pi^2}{2}.$$

さらに  $c_k = k^4 a_k - k^3 + \frac{\pi^2}{4} k$  とおくと、⑤より

$$c_k = -\left(5 + \frac{8}{k} + \frac{4}{k^2}\right) b_k - \frac{\pi^2}{2} - \frac{\pi^2 b_{k+2}}{4(k+2)},$$

$$\lim_{k \rightarrow \infty} c_k = -5\left(-\frac{\pi^2}{4}\right) - \frac{\pi^2}{2} - 0 = \frac{3}{4}\pi^2.$$

また

$$k^p a_k - k^q A - k^r B \\ = k^{p-4} \left(k^4 a_k - k^3 + \frac{\pi^2}{4} k\right) \\ + k^{p-1} - \frac{\pi^2}{4} k^{p-3} - k^q \cdot 1 - k^r \cdot \left(-\frac{\pi^2}{4}\right) \\ = k^{p-4} c_k + (k^{p-1} - k^q) - \frac{\pi^2}{4} (k^{p-3} - k^r) \quad \dots\dots \text{⑥}$$

$$= k^{p-1} \left\{ \frac{c_k}{k^3} + 1 - k^{q-p+1} - \frac{\pi^2}{4} \left(\frac{1}{k^2} - k^{r-p+1}\right) \right\}. \quad \dots\dots \text{⑦}$$

ここで

$$p > q > r \geq 1 \text{ より } p \geq 3,$$

$$p > q > r \text{ より } p \geq r+2 \text{ つまり } r-p+1 < 0$$

より

$$\lim_{k \rightarrow \infty} k^{p-1} = \infty,$$

$$\lim_{k \rightarrow \infty} \frac{c_k}{k^3} = \lim_{k \rightarrow \infty} \frac{1}{k^2} = \lim_{k \rightarrow \infty} k^{r-p+1} = 0$$

から、⑦が収束する必要条件は

$$\lim_{k \rightarrow \infty} k^{q-p+1} = 1 \text{ つまり } q-p+1 = 0$$

より  $q = p-1$  である。

この下で

$$\text{⑥} = k^{p-4} c_k - \frac{\pi^2}{4} (k^{p-3} - k^r). \quad \dots\dots \text{⑧}$$

(ア)  $p-3 > r$  のとき

$$\text{⑧} = k^{p-3} \left\{ \frac{c_k}{k} - \frac{\pi^2}{4} (1 - k^{-p+r+3}) \right\}.$$

$p-3 > r \geq 1$  より  $p > 4$ ,  $-p+r+3 < 0$  より

$$\lim_{k \rightarrow \infty} k^{p-3} = \infty,$$

$$\lim_{k \rightarrow \infty} \left\{ \frac{c_k}{k} - \frac{\pi^2}{4} (1 - k^{-p+r+3}) \right\} = -\frac{\pi^2}{4}$$

より⑧は発散する。

(イ)  $p-3 = r$  のとき

$$\text{⑧} = k^{p-4} c_k.$$

$\lim_{k \rightarrow \infty} c_k = \frac{3}{4}\pi^2$  より、⑧が0でない値に収束する

のは  $p=4$  つまり  $q=3$ ,  $r=1$  のときに限り

り、このとき  $\lim_{k \rightarrow \infty} \text{⑧} = \frac{3}{4}\pi^2$ .

(ウ)  $p-3 < r$  のとき

$$\text{⑧} = k^r \left\{ k^{p-r-4} c_k - \frac{\pi^2}{4} (k^{p-r-3} - 1) \right\}.$$

$p-3 < r$  つまり  $p-r+3 < 0$  より

$$\lim_{k \rightarrow \infty} \left\{ k^{p-r-4} c_k - \frac{\pi^2}{4} (k^{p-r-3} - 1) \right\} = \frac{\pi^2}{4}$$

であり、 $\lim_{k \rightarrow \infty} k^r = \infty$  より⑧は発散する。

以上より、 $k^p a_k - k^q A - k^r B$  が0でない値に収束するのは  $p=4$ ,  $q=3$ ,  $r=1$  のときに限り、

その極限值は  $C = \frac{3}{4}\pi^2$ . 〇

【配点例】(60点)

(1)(計 5点)

(ア) 結論に 5点.

(2)(計 15点)

(イ) ②に相当する変形に 5点.

(ウ)  $a_{k+2}$  あるいは  $a_k$  の不等式に 5点.

(エ)  $A=1$  に 5点 (結論のみでも OK).

(3)(計 20点)

(オ)  $\lim_{k \rightarrow \infty} (k^3 a_k - k^2) = -\frac{4}{\pi^2}$  までに 10点.

(カ)  $m=3$ ,  $n=2$  の必要性の議論に 10点.

(4)(計 20点)

(キ)  $\lim_{k \rightarrow \infty} \left(k^4 a_k - k^3 + \frac{\pi^2}{4} k\right) = \frac{3}{4}\pi^2$  までに 10点.

(ク)  $p=4$ ,  $q=3$ ,  $r=1$  の必要性の議論に 10点.